第7章

通信社の技術

概要

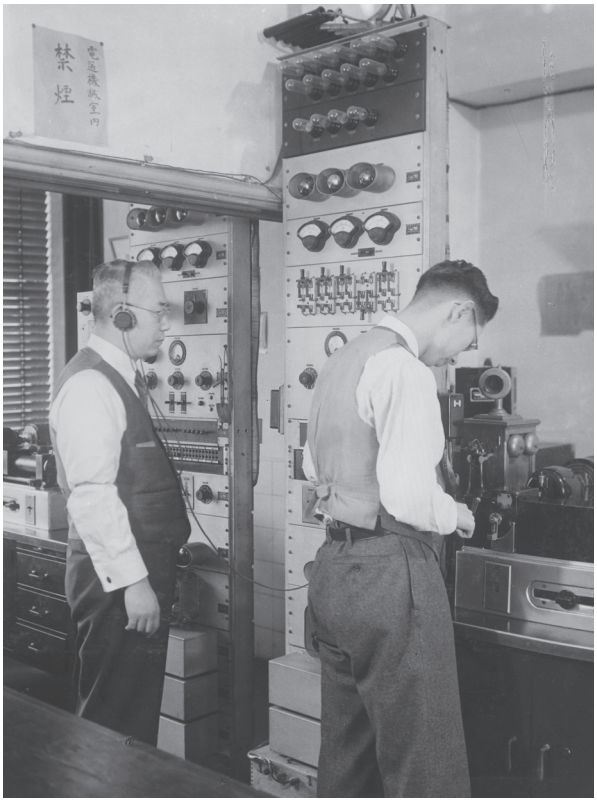
「通信社の歴史は、通信技術の歴史と表裏一体をなすものである」―『通信社史』はこう指摘した上で「もし通信社が通信技術の進歩に無関心だったり、新しい通信施設を取り入れることを怠ったりすれば、自滅してゆく他ないであろう」と記した。

日本に最初の通信社ができた1880年代には、新聞通信の手段として有線電信が用いられた。日露戦争（1904～05年）以降は電話の利用が活発になり、第1次世界大戦（14～18年）の頃から無線電信が新聞通信の手段として本格的に利用されるようになった。最初は長波だったが、次第に短波に切り替わった。

本章に収録された座談会によると、同盟通信社の古野伊之助社長は無線を「通信社の生命線」と考えており、海外支局視察の際には「必ず無線関係の所に先に来た」という。

時代とともに無線機の小型化が進み、ポータブル無線機は戦場を取材して回る報道班の必需品ともなった。一方、無線機があっても電池がなければ作動せず、電池を「フェルトで巻いて『はっきん懐炉』を入れて保護した」という証言もある。また、ある発言者は「無線連絡が切れると、受ける側は悲壮な感じになる。聞く方で無線が切れるのは駄目だね」と振り返った。

本章で詳しく触れてはいないが、写真電送も通信社の技術として欠かせないものであった。ドイツからいち早く写真電送の技術を導入したのは日本電報通信社（電通）で、ライバルの聯合通信は後れを取った。戦中の同盟では「文字電送機」（今のファクシミリ）の開発も進められていた。



同盟本社電送室＝1941（昭和16）年５月15日

第1節　無線

座談会　無線の活躍

1963（昭和38）年4月6日

（出席者）
竹中三郎　（連絡局電務部長）
菊地久太郎　（連絡局電務部）
川島信太郎　（総務局庶務部長）
猪股芳雄　（華北総局総務部長）
吉田松治　（南方総社電務部長）
阿部孫一　（中華総社通信部長）
宮沢貞男　（元満州国通信社）
藤井信次郎　（編集局写真部長）
佐々木健児　（中華総社長）＝司会

（注）宮沢以外は1944（昭和19）年4月時点の同盟通信社の役職。

❖　❖　❖

佐々木　『通信社史』には、相当なスペースを割いて、通信機構の発達が細大漏らさず記録されています。本筋はもう明らかになっているので、本日は側面的、裏面的なものに重点を置いていただきたい。まず長波時代から入っていきたいが、初めに通信関係で無線電信をニュースに使ったのが東方通信だったと思います。東方が最初に無線機を設置したのは北京。あとはどこでしたか。

猪股　上海じゃなかったか。

佐々木　奉天か。

猪股　奉天はそのころなかった。

佐々木　北京と同時期に置いたと思ったが、先だって大川幸之助さんが原稿を寄こし、それには大正14（1925）年に奉天に置いたとある。その時、大川さんは奉天支局におり、奉天が一番早いと記憶している。僕らは北京にいたので、北京が一番早いのかと思っていた。北京に最初に来たのは加藤君という先輩のオペレーターで、その後に来たのが猪股君だった。

猪股　僕が行ったのは大正15（1926）年9月です。

佐々木　北京に無電を設置したときの裏話がある。当時支那の主権下では無線機が許されていなかったので、非合法に設置することになった。駐屯軍に依頼し、無電の機械を迫撃砲の部品という名目で、箱詰にしたまま北京の公使館区域内の日本の兵営に運んでもらった。兵営で箱を開けて機械を取り出し、自動車に積んで何回かに分けて支社の2階に運び込んだ。2階の一室の窓を閉め切り、真っ暗な部屋にして壁際に台を置き、その上に機械を並べた。えらい大掛かりなものだった。われわれは門外漢で全然分からなかったが、機械はどんなものを使っていたのか。

猪股　日本無線の製作だったと思う。当時、最高の性能の機械で、見掛けも大げさ。アンテナが一つの大きな箱になっていて、箱が七つ並んでいる。そのくらい大げさなものだった。屋内に1間（約1・8メートル）四方ぐらいのでかいアンテナがあり、閉め切っていて中には誰も入れない。支那人も入れない。「お化け屋敷」とか言って近寄らせないようにしていたようだ。それだけ秘密裡にやっていた。それが何年かたってルーズになり、短波に入れ替わってからは、秘密の形がなくなってだいぶ大っぴらにやっていた。最初は秘密にやっていて大げさなものだったが、その割に能率は良くなかったようだ。

佐々木　受信機だけなのか。発信機は持ってこなかったのか。

猪股　受信機だけで発信機はなかった。

佐々木　今の密閉した部屋は、お化けが出ると言ってたが、それがいつの間にか本物になってね。支社の2階には徳光（衣城）さんが住んでいたが、徳光さんの女中さんが、本当にお化けが出ると言って腰を抜かしたことがある。うそから出たまことで、しまいには本当に幽霊が出ることになっていたようだね。

猪股　僕が最初に行った時は、宿舎の入り口は別にあって裏通りを回って行かなければならない。実際は背中合わせになっていた。夜、例えばイギリスの放送とか、ドイツの放送を聞くときには門が閉まって表から入れず、夜中に屋根伝いに行ったことがある。そういうのを見て、起きていた人は怪しく思ったのかもしれない。

佐々木　上海も同じ時期に設置したのか。

吉田　上海も同じですね。ただ上海は共同租界があり、北京と違って治外法権になっていたから屋根裏は屋根裏だが、割合大っぴらに受信できた。受信機は手製だったと思うが、1メートル半ぐらい横に長細いやつで、パネルをついたてのように立てていた。乾電池を使う電気装置だから電池の手入れが大変だったという記憶が残っている。あの機械で随分長いこと受信していた。

　受けにくいのを受けてニュースを出さなければならず、1人しかいないので病気をする暇もない。ところがとうとう病気になり、菊地さんが来てやっと休暇をもらって内地に帰った。代わりがいないので風邪でも大変だ。寝ているとベッドを受信機の傍に運んでくれて「しっかり受けてくれ」というので、鉢巻きをして受信していた。人間の予備は全然なしにやっていた時代だった。

済南事件で短波を初めて活用

佐々木　大正14年5月に日本が初めて海外無線放送を始めた。それを受信するために無線を設置するようになったんですね。

竹中　そうです。

佐々木　受信してニュースを発行するためだね。昭和3年ごろから短波時代に入っているらしいが、その後、長波から短波に機械を替えたのか。

吉田　替えました。昭和3年10月だったと記憶している。

猪股　もっとも昭和に入ったその時分の短波は、一般に非常に小規模のもので遠距離をしていた。実験がだいぶ進んでいた。われわれも受信機ぐらいは何とか作れるので、自分で作ってやってみて、なるほど調子はいいし、相当遠いところも入る。受信機はできるが、発信機となるとそう簡単にはいかないと思っていた。社もそういうつもりで、実現したのが済南事件[51]の時だ。初めて活用された。

佐々木　済南事件は3年5月3日だ。その時は短波に切り替わっていたのですね。

猪股　短波送信機を北京に送る予定だったが、途中で済南事件が起きた。それで臨時に天津に降ろした。上海でも同じ頃、据え付けられたと思うが、初めて短波の交信を天津と上海でやった。そこで済南事件の報道が天津から上海に大量に送られた。

川島　その頃僕は大連の支局長をやっていた。猪股君が天津で発信したのを、大連で手製の短波受信機で受けた。短波でやれば天津、上海から大連で受かるという確信を得た。本社に進言し、上海のゴールドバー相場を大連で受ける相場通信をやることを計画した。僕は上海に行ってロイターとか、当時は新聞聯合だったか、支局長と話をして帰ってきた。そうしたら商業通信社がこっちよりも早く、短波でゴールドバー相場を受けてやり出した。先を越されたわけだ。

　商業通信が非合法の通信をやっている。警察が僕のところへ「どうして発見したらいいか」と聞きにきた。それで受信している場所をどうして調べるか、警察に知恵を貸してやった。別荘みたいなところで受けており、新聞に大きく出て大変な騒ぎになった。それで向こうもやめ、こっちの計画も中止した。結局、先にやった方が警察に引っ張られた。

藤井　ニューヨークの金塊相場だね。

川島　それを向こうでゴールドバー、標金と言った。

佐々木　交信はその時から始まったのか。

猪股　交信はもっと後です。その時は済南事件がたまたま起きて、機械を天津に置いて通信し、事件が済んでからその機械を北京に持ってきた。

川島　猪股君が天津で事件のために臨時に使っているのを大連で僕が同受(同時に受信)した。

吉田　手製の受信機を作って上海でも同時に取った。竹中さんにだいぶお世話になった。私はよく知らないので、当時、敵だった竹中さんの所に内緒で行って、作り方を教わったりした。ダイヤルを回して電波が入ってくれば、それは天津の波で他にはなかった。その点では非常に楽だった。

資材搬入で苦労

佐々木　電通が無線を設置して使い始めたのはいつ頃か。

竹中　海外無線放送と同時に上海に付けたと思う。

佐々木　大正14年だね。

竹中　私は15年1月に上海に行った。電通の場合、私が行った時からラジオ放送を始めると言うので、50ワットの送信機を付け、毎日定期的にラジオを据え付けた。今初めて話をするが、実は有線会社にいた当時、大正12年だったか、帝国通信社にコネができ、頼母木(桂吉)さんの所に3、4人のグループで行って、ラジオ放送の企画をしたことがある。これは関東大震災で挫折したと思うが、新聞、通信社で無電あるいはラジオ関係に先鞭を付けたのは、帝通じゃないかと思う。同じ時分に朝日が企画をしていたが、帝通が先鞭を付けたのではないか。

佐々木　研究と準備をやったのか。実施したのか。

竹中　私は福岡へ行ったり、帝通のために手弁当で方々へ行ったりした。

当時東京無線というのがあり、あそこの機械を持ってあっちこっち回った。

佐々木　それはラジオの声ですか。

竹中　声です。ＮＨＫのラジオが始まる前だ。

佐々木　何年ごろでしたか、それは。

竹中　大正12年です。ラジオという事業について新聞、通信社はその時分から関心を持っていたということではないか。私がその後、電通に入ったのは、そのような経歴があり、電通が上海でラジオ放送をやるというからだ。上海ではそれと並行して内地から無線を受け、両方やっていた。

佐々木　上海でラジオをやっていたわけですか。

竹中　ええ、やりました。電通の経費で何と言うか、宣伝でもあるし。

佐々木　上海で放送局をこしらえたのですか。

竹中　そうです。

菊地　今でいう民間放送だね。

竹中　そうです。あそこは当時租界があったから仕事はやりやすかった。資材搬入は相当苦労しましたが。

佐々木　資材搬入はどこかに頼んだのか。

竹中　内地の材料は密輸入みたいなことをやった。機械はフランス製とドイツ製を持っていた。これは上海租界内で購入した。

佐々木　川島さん、大連にいた東京の升井（芳平）さんと、交信というか受信というか、成功したと書いていましたね。

川島　それは満州事変（1931年9月18日）の時ではないか。それより前、昭和4（1929）年に古野さんが大連に来られて、（千葉の）船橋からの聯合の新聞放送を大連で受けて、新聞社にやろうということになった。非合法だから僕の家の2階で短波受信機で受け、それをガリ版で書いて新聞社に送った。そしてその後、大体1時間か2時間後に、表向きの予約電報でどんどん同じものが新聞社に入ってくるというインチキをやった。満州日報、大連新聞の2社と契約し、関東軍、関東庁[114]に配布した。

　それより前、僕が短波受信機を自分で作って、猪股君が天津でやっているのを同受して「これはわけない、これをやりましょう」ということで、非合法で随分長くやっていた。満州事変が起きたときにはもうやっていた。

佐々木　『通信社史』によると、升井さんが個人的に研究を進めていた。昭和4年に素人無線局設置認可を得て、その第1信を当時大連支局にいた川島信太郎に送ることに成功した。

川島　僕が手製の短波受信機で升井さんが送るのを受けて、「よく入る」という返事を出したんですよ。

佐々木　テストだけですか。

川島　そうです。実用にはしなかった。

阿部　私はまだ入っていなかったが、昭和4年に吉田さんが入り「升井さんが短波をやり出した。あんた何かないか」と言われ、私はトランスを手製でこしらえたり、内職で素人技師をやっていたので「これを持って行かないか、あまり能率はよくないけれど」と言って一式あげた。吉田さんに連絡したら「できた」と聞いた。

吉田　短波の新聞放送を始めたのが確か昭和3年10月です。

菊地　私が新聞聯合に入ったのは昭和3年7月。最初に上海に赴任した。当時はまだ長波時代だった。朝、昼、晩と特別長波で対米通信をやっていた原ノ町の送信所の新聞電報、これが1万㍍ぐらいの波長だ。それから船橋から発射されていたＪＣの39ＫＣ、最近まで発射していた７７００㍍のやつ、これを1日3回くらい同受して、新聞原稿を受けて編集していた。

短波による新聞電報の放送が開始されると冒頭に「全国の紳士諸君、ただいまから短波による新聞電報を発射するからよろしく」という文句が入っていた。手製の受信機で、呼び出しの用語はJAL、波長が25メートル04だった。当時はまだ短波の回線状態が非常に楽だった。特別波長の受信体制は3年10月で打ち切られ、それからは短波になったと記憶している。

吉田　放送回数も十数回増えた。供給先も長波時代は外務省の出先機関ということだったのが、新聞社の英字紙、華字新聞のいわゆる日本語紙や商社に拡張された。受信機は支那では北京、天津、済南、青島、上海、漢口、広東にあり、その他に台湾と満州の主要地で受信していたようだ。

短波の発信は非合法だったので天津、上海で通信を始めたのはずっと後になる。上海に発信機を持ち込んだのは昭和2年8月だ。発信機をあっちへ持って行ったり、こっちへ持って来たりして安住の地はなかったのではないか。上海も同様で、据え付ける場所がないので移動ばかりしていた。昭和2年8月27日から上海で第8回極東選手権大会[18]が開かれた。これを発信するために臨時に据え付けて向こうからジャンジャンとオリンピックニュースを送り込んだ記憶がある。

佐々木　自分の手で無電を使ってニュースを送った最初ですね。

吉田　ええ、これはもちろん東京で受けた。このとき東京で受けたのは、おそらく升井さんだと思う。

佐々木　電通はどうだったのか。

竹中　電通もラジオ放送に使う送信機が電信にも使えるので、電信に切り換えて盛んにやった。

佐々木　やっぱり競技大会のニュースを送ったわけだね。

竹中　そうです。

菊地　私が(上海に)行った当時、送信機が倉庫みたいな暗がりに雨ざらしになっていた。それを復活して正式に使いだしたのは、4年の暑いころじゃなかったかと思う。それから正式に天津と交信を始めた。当時の機械が日本無線の送信機で、当時1キロワットと称していたが、実際のところ250ワットですね。送信管が300D、それからS250Sという一本玉の送信機です。

阿部　私が行くと、磨き丸太のような太いのがゴロゴロ置いてある。「猪股さん、これ何ですか」と言ったら「受信機の枠じゃないか」と。大きな床の間の柱みたいのがあった。

竹中　電通も聯合も並行してやっていたようですね。北京には租界がなくてかなり苦労した。

吉田　私の記憶では、あんな大きな発信機を7回か8回移転しているはずだ。租界のある所でもかなり危なくて、移転ばかりしていたようだ。

猪股　済南事件の時に天津で使った機械はその後、北京に持って来た。僕は奉天に行ってそのときに古野さんが回って来られた。その放送を聞いて「とにかく君たちは、受信機1台担いで支那のどこでも出て行って、そこでニュースを取ってどんどん出そうじゃないか」とハッパを掛けられた。

佐々木　日本の内地でパングボーンの太平洋無着陸横断飛行に無電を使ったようだが、その時の関係者はいないか。

宮沢　吉井君がいた。

阿部　吉井君がいろいろ話をしてくれた。淋代(さびしろ)(青森県)の漁師の家に泊まり、松の木にアンテナを隠して張っておいて、飛行機のたつところまでは各社の連中と一緒に行って、いよいよたつという時に走って帰ってきて打つということをやっていたらしい。升井さんはそのときは？

佐々木　仙台にいた。

宮沢　あのときは分からないように、郵便局まで行って空の電報を打っ

たというのだ。

阿部　リンドバーグのときは私がいた。

佐々木　リンドバーグのときも使ったの？

阿部　夫婦でやって来た。太平洋横断だね。北の方から回って来た。そのときは吉井君、升井君と2人一緒に出た。仙台に一緒だったかもしれない。私は本社にいたのだが、本社では受からなかった。

外電同受を開始

佐々木　今までのは揺籃（ようらん）時代。次に満州事変で始まる急速な無線の発達期に話を進めたい。

吉田　その前にわずかだが、外電同受の期間がある。昭和11年に本社に企画部というのが初めてできた。部長が鷹嘴（たかはし）寿さんの兼務、私が次長ということで、本社と吉田の家、近藤精教君の家と3カ所でDNB[238]、ロイター、アバス[77]などのモールスのニュースの同受を始めた。

国内では企画部が、連絡部から分かれて独立したセクションになった最初だ。現在の技術部とか外電部の前身だ。こういう変則的だが合法の外電同受は、昭和16年に愛宕（あたご）山と上福岡の受信部で逓信省に正式に頼んで受けるようになるまで続いた。

阿部　天津事変[265]は古野さんの家で取ったね。私はまだ入って間もないし、慣れていない。吉井君がいないし、私はしょうがないから古野さんの家に飛んで行った。ちょうど、佐々木さんが南京から帰って、川島さんがこっちに来られた。

川島　それは満州事変後でしょう。

阿部　古野さんの家へ持ち込んで、川島さんがいた。

川島　僕の家では宮沢君、吉井君で短波受信機を盛んにこしらえていた。

吉田　吉井君の後に僕が上海から帰ってきた。昭和7年ないし9年の上海事件の後だ。企画部が設けられる前で、吉井君が中心になって、古野さんの家辺りで外電を細々と受けていたはずです。

阿部　古野さんの家に泊めてもらった。ベッドが押し入れの中にあった。

佐々木　満州事変の頃は、奉天や大連には発信機はなかったわけですね。電通も持っていなかったのか。

竹中　なかったですね。

佐々木　その頃はね。

川島　僕は、満州事変が起きた昭和6年10月に本社に転勤になった。すぐ満州事変用の無線発信機を注文しなければいかん。「お前探せ」と言うので、日本無線に大急ぎで1キロワットの送信機をひそかに作ってもらった。それが非常に早くできた。

阿部　手製を升井さんが設計された。受信機と送信機とがあり、それを木の重い箱に詰めたのを10台近く作った。

川島　僕が持って行ったのはトランクのやつだ。送信機と受信機だ。それは日本無線の1キロワットよりは先に行っているはずだ。

阿部　それはほとんど持って行った。1台ぐらいしか残っていなかった。

川島　奉天で全般のニュースを集めて送信するのはよく入るんだ。何の苦労もない。上野と僕と2人で、交代で受けていた。正月は大阪の宿屋で少し受けた。しばらくして上野が上海に移った。それで僕はトランクを下げて福岡に行った。福岡で専ら上海の送信を受けて、オーケーだけは出したと思う。

ところが当時は逓信省がやかましい。無線を無断で悪用している社があると言って、もう分かっていたんだ。福岡も危なくなってきたので長崎に行った。長崎に行ったら上海の無線が大きすぎるくらい入る。借りていた家の人が「あんた、一体何しているんだ」というわけで、何とか

ごまかしてやっていた。

宮沢　そうでしたね。確か昭和6年11月ごろだったか、銀座8丁目の細長い建物のてっぺんに持って行ってやってたら、手入れされるというので、岩永さんの車に乗ってどこかに運び出そうということになって隠したんだ。

佐々木　これからは柔らかい話題を。

宮沢　満州の無線は京城（現ソウル）で誰かが中継していた。

川島　私は6年の暮れから7年の正月にかけて大阪に行って宿屋に1人住まい。宿屋でお客さんは僕1人で、非常に歓待された。大阪支社の屋上では股火鉢で交代で受けていた。寒くてしょうがない。向こうの送信時間の合間に温まってこようと、ビルの下にあるおでん屋で一杯やって、温かくなったらまた上に行ってやっていた思い出がある。

　福岡では支局長が心配して手入れされると大変だからというので、受信機を担いで市内を転々と回り、いよいよ福岡は危ないからどっかへ行ってくれと言われて長崎に飛ばされた。

竹中　話を聞いてみると、非合法時代は電通の方が消極的だったね。聯合にはサムライがそろっていた。

川島　大連でも船橋、JJC、あれを短波で受けて出していた。それを電通と聯合の合併まで吉川次長が気付かなかった。「しまったな。前に知っていたら摘発してやるんだった」と後で言っていた。

憲兵隊に引っ張られる

佐々木　最初に私が行ってから、無電を十二分に活用する以外に聯合がニュースで勝つ手はないと、決死の覚悟で無電の活用に努力した。無電の発信機が当時なかったのを急きょ運び込んでもらい活用したが、軍の報道部、当時の関東軍第4課の課長以下みんなと懇意だったので、私が無電をどんどん活用するのも黙認の形だった。

　そのうちに錦州（きんしゅう）攻撃が始まり、一度は中止になったが、営口（えいこう）と京包線[266]両方から従軍班を出した。京包線に行く班に僕は「列車から発信できなければ駄目だ。聯合は人数も少ないし、金もない。よその社に太刀打ちできない。無電さえあれば必ず勝てる。無理でも積み込める工夫をしてくれ」と無茶なことを言った。

　どういう仕掛けになったか知らないが、貨物車の上にアンテナ張って工夫してくれたようだ。営口から行く班は、まだポータブルのトランク詰めにならない発信機を積み込んだ。両班を出発させ、本格的な作戦開始まで奉天との間でテストを繰り返し、「これで大丈夫、大勝利」と大いに力んでいた。

　第1回の錦州攻撃は中止になったが、新民屯（しんみんとん）（現新民市）と奉天との間でテストを毎日、毎日繰り返していた。波長の打ち合わせなんかやりながらね。ある日、新民屯の領事館から電話があり、打ち合わせをして僕は森元治郎（もとじろう）を呼び出したつもりなのにどうも話のつじつまが合わない。後で分かったが、電通の記者が一杯機嫌で森になりすましていたのだ。打ち合わせた時間にいくら呼び出しても新民屯の野戦支局[103]が出てこない。おかしいのでまた領事館に電話を掛けたら、今度は本物の森が出てきた。「どうして打ち合わせた時間に出ないのだ」と怒鳴ったら「俺は何も聞いてない」。調べたら電通の原山君らが、悪気はないのだが、一杯機嫌でいたずらしたんだ。

　7年1月の早々か、暮れだったか、非合法無線を使用していると言って、升井さんと私が憲兵隊に引っ張られて取り調べられた。初め升井さんが連れて行かれたが、帰されて責任者ということで私が連れて行かれた。明け方ぐらいまで尋問された。結局、釈放されて事なきを得た。

無電で思わぬ特ダネを拾ったことがある。世界が注目していた錦州攻撃が本格的に始まる時、関東軍が声明を出した。攻撃開始の前の晩、東京に向かって関東軍が平文で、こういう声明を出すということを連絡していた。それを帆足君か前田君が、無電機をいじくっていたら面白そうなのが入っていると言って、ちょこちょこっと書いて私のところに持って来た。見ると錦州攻撃の関東軍司令官声明だ。これは取れというわけで全文取った。早速記事にして翌日の朝刊に出た。

関東軍は翌日昼すぎに発表した。その間、電通はじめ各社は、関東軍声明という大事なものを落とすとは何事だということで、手厳しく本社からお小言を食らって右往左往だ。関東軍第4課に詰めかけた。聯合の入手方法については詮索なしに終わった。関東軍第4課の課長以下全員とガッチリ手を組み、満州国通信社をこしらえるという大仕事と取り組んでいたから、本当ならえらい目に遭わされるところが問題にならず、関東軍声明という非常に重要なものが特ダネになった。

携帯用無線機を実用に供して成功した最初は熱河作戦[107]だ。英国人のポーレー夫人が営口の奥地で匪賊（ひぞく）に捕まって身代金を要求されるという大きな事件があった。賞金1万ポンドか10万ポンドかを出すというので、大阪の親分が満州に子分を連れて来て正義団というのをこしらえて関東軍に協力し、ポーレー夫人の救出に活躍した。この時はまだトランク詰めではなく、抱えていくような非常に重たいものだったですね。

阿部　私が最初にポータブルをテストしたのが6年9月。吉井君がいて大阪からこっちも準備ができているからテストするようにと指示された。上野君がいて、吉井君もいたかな。ボルトを上げたり下げたりしてテストしたら全部いける。大阪と東京だが、交流から電池に替えてやったら90トンボルで通じる。テストをやって、結局その時にだいぶん出たんじゃないかと思う。

通信隊の将校も見学に

吉田　支那事変になってからポータブルを出したが、機械の修理は種々雑多だった。

阿部　手製が多いから。

宮沢　熱河討伐のときは、国通式で規格を統一しろ、そうでないと間違ったらいかんと言うので、5台つくらせた後で、また5台つくらせた。これが割合よくて、みんな馬車に積んで行った。馬車の上からちょっとアンテナを出すと、どこへ行ってもうまく通じる。波長のやり方も良かった。

吉田　北支の方は阿部さんと山本さんが一生懸命、横に一升瓶を置きながら作っていたね。北支の方ではどうかな。

菊地　シンショー洋行と大東公司があって、大東公司の方が積極的に協力してくれた。本社でポータブルを作ってくるまではほとんど大東公司につくらせた。上海で通信隊の将校さんが見学に来た。「ちゃちな機械で同盟は通信の連絡をジャンジャン取っているじゃないか。兵隊の通信網はさっぱり通じない。一体どういうわけか。機械を見せてください」と言うので、見せてやったが、小さいのに驚いていた。

佐々木　熱河作戦の時の大連港辺りの送信を奉天で受けた。その頃のポータブルというのは、何と言ったって性能が違う。歯抜けなんですよ。

吉田　歯抜けなしにニュースが通じるというのはまずなかった。だから受ける方も最も優秀なのを置いて、入ってこない電波をいかにして耳でつくるかということに苦労した。送る方は大きな電池を抱えて、兵隊さんと一緒になって歩いて行き、やっと開設してニュースをたたけどたたけど通じない。徐州作戦[147]のときなんか、中井延次郎君が「徐州が落ちた」というだけのニュースを30分ぐらいたたいていたこともある。

それを受け取ったのが私だが、落ちたのか、落ちそうなのか。片仮名で5、6字の所がどうしても分からない。30分ぐらいたたいてもらって、やっと「落ちた」ということを確認して出したことがあった。当時は新兵器に違いないが、後で見ると、精神力で補っていたという感じだね。みんな死に物狂いだった。

宮沢　新聞社の競争意識が強かったんだろうね。特ダネ意識だね。無線機を開設して店が開くとすぐに記事を取りに行く。それで連絡を取る。送る時は本当に一苦労だ。電池の補給はきかない。なくなったら大変だ、どんなことがあっても、自分の着ているものを脱いででも機械と電池だけは守らないとどうにもならん。

藤井　上海に行っているときに聞いた話だが、受信の神様が中支は菊地久太郎、北支は誰とか。

菊地　津田栄太郎。

宮沢　あれはうまかったね。そういう話を聞いた。

菊地　機械の神様は升井さんだね。

川島　何と言っても開拓者は升井さんだ。あの人が非常に苦労して送信、受信機をつくった。聯合の弱い地位を無電でカバーしなければいかんということは、もちろん古野さんの力強い後押しがあったのだろうけれど、僕らは升井さんの設計した受信機を宮沢君と吉井君で一生懸命つくった。それが満州事変で役に立った。

宮沢　無線機を持って行くと、朝、毎、読でも何でも「戦況は聯合さんに任せる。俺たちはサイドニュースでもやるよりしようがない」というようなことをよく言われた。

阿部　京漢線に乗っているとき、兵隊さんが「このトランクなのか」というから「そうです」「これで通じているのか」「通じている。毎日やっている」と言うと、「ちょっと君、来て見てくれんか、俺のところは具合が悪くて通じない」と。どこへ行くのかと思ったら装甲列車だ。「これじゃ駄目ですよ」と言ってやった。

猪股　軍の無電の性能はどうも少し落ちるようだね。北京で受信機が壊れ、通信隊に知り合いがいるので「受信機貸してくれ」と言って借りたら、非常に性能が悪い。

佐々木　真空管の性能が悪いのですか。悪い材料を悪徳御用商人から押し付けられていたんじゃないかね。

宮沢　そうではないらしい。互換性を考えて進歩しても新しいのをとり入れないということではないのか。

竹中　今考えると、ああいうしっかりした完成品は計画してから1年、2年立たないと出てこない。われわれが設計したのは5日ぐらいで出てきた。技術はどんどん進歩しており、われわれの方式が新しいのだな。

猪股　短波も波長や空間の状態でいろいろと違う。それがまたうまい具合に置くと非常によく入ってくる。場所によって波長が非常にいい所と悪い所がある。天津事変の時は、夜になるとスーッと消えてどうにもならない。本社かどこかで受けているだろうし、とにかく打つだけは打ってみろというので、12時すぎまで打ったことがあった。阿部さん、本社にいて聞いたね。

阿部　取ったことがありますね。第一報が女の人がどこかけがをしたとか。私が取ったが、入って間もないからニュースというのがピンと来ない。いいかげんに取っていた。ローマ字でしょう、慣れていないし、いいかげんに取って虫食いだらけで空いていた。

　そうしたら騒がしくなって「天津で何かある。何か聞こえないか聞いてみてくれ」と福岡さんですよ。怒って「入っているのを俺の所にどうして持ってこないのか。今大騒ぎしているじゃないか。何しているか」とえらいお叱りを受けた。おおよそのことは入っていた。女1人、大腿

部骨折か何か。飛び飛びに聞こえた。

猪股　上海に行って夜暗くなった後で連絡してもさっぱり通じない。とにかく打つだけは打ってみよう、どっかで聞いているかわからんと打った。

竹中　そういう方法で成功した例が随分ありますね。

吉田　精神力じゃないけれども、競争意識が強いというか、連絡相手が出なくても必ず反復して送った。昔のニュースは。

川島　今とは気構えが違うね。聯合と電通の競争意識、みんな古野社長の「あとは俺が引き受けた。やれ」という激励を受けていたからね。

正月も休みなし

阿部　正月は1日しか休みがないのには参った。元日だけで、戦争が始まり満州事変でガタガタやり出した。

川島　元日も休まなかったよ。昭和7年の元日ね。

佐々木　7年の元日は休むどころじゃない。錦州攻撃の最中で3日が錦州入城。休めないですよ。

川島　元日も休めなくてずっと受けていた。

猪股　錦州攻撃の前だったかな、阿部さんが天津に来てくれたのは。あそこの小学校で12月30日か31日に総退却した。

阿部　猪股さんと私が「これを間違ったら腹切って死ななければならん」と。支局長はいないので、猪股さんがちょいちょい来てくれて…。

猪股　先遣部隊が何とか会館を通過した。それで総退却と打った。

阿部　支局長に聞こうと思ってもいない。猪股さんと2人で「ぐずぐずしちゃ間に合わん。間違ったら首だ。やっちまえ」と。

吉田　とにかく休みというのはなかった。盧溝橋だったか、広安門事件[134]か何かで本社と直接やるようになってからだ。13年ごろだね。本社も人間が少なくて、私は1週間とうとう家に帰れなかったことがある。この時はさすがに古野さんも岩永さんも気の毒になったとみえて、日に2、3回、「おい、大丈夫か」と見舞いに来てくれたことがある。とにかく寝る暇がない。受話器をかけっ放しだった。

阿部　仁川に行って3カ月ぐらい帰してくれない。腹具合が悪くなった。豆ばかり食わされたからでしょう。どうも具合が悪いからと帰ったが、人がいないから来てくれとまた出された。

宮沢　僕はポータブルを軍と軍の勢力争いで使えなくなったことがある。張鼓峰事件[105]のときで、張鼓峰の関東軍からお墨付きをもらい、万全の策を講じて行ったのだが、ご承知のように張鼓峰というのは朝鮮軍なんだ。少し先で据え付けてやろうとしたら、「いかん」と待ったがかかった。「(お墨付きを)もらって来ている」と言ったら「これは川からこちらは効かない」。しょうがないから爆撃した川を渡った。電気がなく真っ暗だ。匪賊も出る。

　実情を探ったら各社が反対したんだ。満州では使っていいが奉天では電信法で使えない。そういう目に遭った。5日間いたが開店できない。僕は電報の走り使いをさせられて途中でやめた。一緒にいたのは中村敏さんだ。

阿部　敏さんも最初は随分前線を走った。

宮沢　もう一つ失敗したのは、軍艦「足柄」で無線を開設するというので、一緒に行ったのが井口さん。井口さんは特送隊の大尉で、関東軍が前に見えたから早速甲板で店開きしてアンテナを張った。やり出したら「何だ」と言って来た。「こういうものだ」と言ったら「軍艦の上でやってはいかん。作戦の一こまがばれる。第一、甲板の上で無線機をやるなんて初めてだ」と言われてとうとう引っ込めた。上がって波打ち際に棒を立

てやった。これは写真がありますね。井口さんは原稿が書けないから、口で言って「山東半島に上陸した」と一報を入れた。それから馬車に乗せて青島（チンタオ）までガタガタと行った。

吉田　本社でポータブルを本格的に作り出したのは13年半ばごろだった。一番苦労したのはバイアス湾の敵前上陸のとき。距離が非常に遠いので、従来の12Aプラス発信機じゃ届かないと言うんで、初めて少し大きい807のポータブルを作った。これももちろん電池で、電池が大変なんだ。発信機も非常に重いが、担いでみて100（メートル）ぐらい歩けた。これなら持てると言って細波君に担がせ、電池その他は連絡員に持たせて、バイアス湾の敵前上陸の輸送船団に乗せた。船の上でも、上がってからもやれて非常に成功した。

川島　天津に使ったのは何（ワット）ぐらいか。

猪股　一番最初のサイゴンに使ったのを天津に持っていった。入力は1（キロ）、出力が250だ。

竹中　南方は通信しやすいですね。

吉田　南方はいいですね。もっともそのころ、支那も本邦も本格的に許可を受けて、無線の連絡も完璧だからね。南方に行って苦労しなかったのは、支那と違い、こちらは占領地に乗り込んで行く凱旋将軍だからだ。サイゴンなんか無線局を設置するにも、フランスの本格的な送信所に乗り込んで行って、「ここに置くぞ」と言って、こちらの汚いのを置いて「おい、あのアンテナを張れ」という具合に行った先で威張って置けたから楽だった。

宮沢　とにかく毎日、毎日移動でしょう。大変だった。食糧の心配から何からしなければならない。一番苦労したのは、湘桂線[267]を下って桂林から柳州ですね。昼間は何にも取れないから夜やるので苦労した。報道部員でも朝日、毎日の人は協力してくれない。こちらも同盟の特派員とは付き合うが、あとの記者とは親しくしないのでだいぶお冠だったけれど。

竹中　済南支局の支那人オペレーターが終戦後も済南に駐屯して、共同通信の者がだいぶ厄介になったそうだ。彼は航空中尉だった。それを同盟のオペレーターに使っていた。

阿部　背の高い人でね。李と言ったかな。

吉田　南方の連絡については、古野さんが全部回って歩いた。

阿部　吉田さんは飛行機で落ちたことがあるんでしょう。

吉田　何回か落ちた。古野さんは南方をよく歩いた。大森君と僕が軍と交渉して回った。

無線機名目で中古車購入

宮沢　古野さんは無線通信に非常な関心を持っていた。森久（国通社長の森田久氏のこと）さんはあまり関心を持たない。予算を出しても「何だこんなもの」だ。古野さんは無線通信を育成しようとしていた。

吉田　マニラで自動車がないと不便で仕方がない。ところが本社はどうしても許可しない。無線受信機を買うと言うと、たちどころにOKなんです。受信機は1000円ぐらいする。無線受信機と称して自動車を買ったことがある。報告は無線受信機になっているが、実はフォードの中古を買って乗り回した。

藤井　無線班はあまり殉職者を出さなかったの？

吉田　随分出ましたよ。特にマニラ地区ね。支那事変では病気はなかった。

菊地　支那事変はなかった。マニラだね、それから台湾海峡。

吉田　マカッサルからジャワに渡る海峡。ここで大分犠牲者が出た。

阿部　台湾からの帰り。

菊地　鵜沢君だ。

藤井　前線と言っても移動途中だ。

吉田　終戦後の食糧難と無理な行軍でだいぶ死にましたね。

宮沢　僕は重傷でないのに、鈴木幸次郎さんが重傷にしてしまい、うちの親父がだいぶ慌てたことがある。満州事変のとき、アンテナを立てていたところに迫撃砲がポーンと来た。アンテナが吹っ飛び、無線はぷっつり切れた。後で大西さんが「あれは鈴木君が早まってあんなことをした」と盛んに釈明していた。

藤井　無線連絡が切れると、受ける側は悲壮な感じになる。篠原が残敵掃討に行って敵に包囲された。攻撃を受けつつあるというのが入ってきた。最後に「家族をよろしく頼む」と打ち込んできた後、ぷっつり切れてしまった。てっきりいかれたと思った。聞く方で無線が切れるのは駄目だね。

佐々木　ポータブルをこしらえるとき、水にぬれたりすることへの対策は、大きな問題になっていたのでしょうか。

吉田　あまり考えなかったですね。

川島　部品をつくったり、集めて並べるだけで精いっぱい。十分に部品がない。

吉田　電池はぬらさないよう包んで石油缶に入れた。ハンダ付けにし、ハンダを外して使う。雨期の行軍の時には。そういうことはしたが、機械そのものの防湿は考えなかった。

菊地　満州では宮沢さんが随分苦労された。昭和18年1月に関東軍の指導下で大報道演習というのがあった。私と石橋君が東京と上海から行ったが、電池、機械の防寒装置は立派なもんでしたね。おかげさまで同盟だけ通じた。朝日、毎日、読売は全部通信できず、同盟は面目を施した。

宮沢　電池が貴重品ですね。

菊地　フェルトを巻いて「はっきん懐炉」を入れ、その中にまた箱をつくって電池を入れた。毎日毎日、行軍で上げ下ろしはくたびれたが、最後まで順調にいった。

無線は通信社の生命線

佐々木　無線機材の整備は、古野さんの指導で同盟はもちろん国通でもあらゆるものに優先して力を入れた。国通も周到な研究をしていたようだし、機材の数も相当余裕を持っていた。同盟でも支那では北支が一番余裕を持っていた。送信機、受信機ともに相当な予備があった。終戦の少し前、内地がやたらに爆撃を食らって支局がやられる。内地の発信機はほとんど壊滅状態だった。

　宮沢君と私は、終戦の2、3カ月前に本社に戻った。その時、古野社長から「内地の送信機は全滅だ。憲兵隊などに働きかけて送信機をつくる機材を集めようとするが、容易にいかん。北支と国通にある予備の機械をできるだけ多く内地に運び込んでくれ」という話をされた。相当の台数があったはずで、運び込む手はずをしていたが、運び込む前に終戦になった。

猪股　はっきりは覚えていないが、佐々木(健児)君が北京で無線機をどんどん買う。金に糸目はつけない。無線関係の人たちは張り切ってね。阿部君がいたかな。佐々木さんが金に糸目はつけないから無線機をつくれと言ってどんどんつくったことがある。

阿部　終戦前ですか。私は南京に行っていた。

猪股　技術者も割合に良いのがそろっていたので、大いに馬力をかけてつくった。終戦時には立派な機械をそろえていた。

佐々木　阿部さんがまだ放送局にいたから、部品は相当蓄積した。それ

でき上がったのもだいぶあった。

藤井　品物は押さえられたのか。

佐々木　みんな押さえられた。

吉田　南方では受信機などはほとんど外国製を使った。部品は割合にあったので、ある場所に乗り込むとそこでまずラジオ屋に行き、使えそうなものをみんな買い集めた。非常に安く、向こうはビクビクしているから「これでいいだろう」と言うと、こちらの言う値段で分けてくれた。豊富な資材を持っていた。

藤井　内地からは補給ができなかっただろう。品物もない。

佐々木　むしろ満州、支那から出来上がったものを送ったということですね。

吉田　古野さんは回って来たら必ず無線関係の所に先に来た。

佐々木　通信社の生命線と考えていたからね。

暗号、隠語で連絡

吉田　十七、八年ごろの支那、南方と本社を結ぶ無線連絡網は大変なものだ。完璧だったね。今の内地の専用線以上に便利に使っていた。私用のバタ（社内の連絡文）でも何でも特別の暗号を作っておき、支那にある特別なゴム製品を暗号で広東に頼んで軍用機で取り寄せたり、あらゆることに使っていた。

藤井　「ローネーオー」というのは一体何です？

吉田　当時は無線機という言葉を使えない。何か隠語をつくらなければならない。

佐々木　ガリ版を印刷する輪転機があり、「ローネーオー」と言ったんだ。

藤井　同盟だけの名前だな。

吉田　隠語です。暗号は読まずに隠語の方が多かった。いろんな隠語を使っていた。しばらく南方で使っていたのはタイプライターでたたく隠語だが、指を一つずらしてたたくんだ。指を一つずらしてたたくと本物が出る。これは割合に分からなかった。いちばん簡単なのは、ローマ字で送っている頃は、最初の文字を反対にひっくり返してたたいて、後を普通にたたく。読む方は最初の5字か10字をひっくり返して読めば文章になる。

　しかしああいうのは、すぐ読まれたようだね。他の新聞社が同受して、10分か20分、時間を稼げばいいというような暗号はだいぶん作った。その間にこちらは印刷して出す。連絡関係は総勢何人ぐらいいたのか。

菊地　支那人や外国人まで入れると３００人ぐらいではないか。

吉田　南方でも現地人を普通の連絡には使った。放送受けは全部現地人を使った。

阿部　和文も最後には取るようになった。

川島　支那人のオペレーターを佐々木さんの所で養成していた。僕が日本に帰ってから見学に寄こしたね。二、三十人留学させた。

佐々木　留学もさせたし、見学にもやった。

川島　宝塚の少女歌劇を見せに鈴木幸次郎が引率して来て、僕が宝塚歌劇場を見せて外に出た途端、空襲で逃げ込んだことがある。

佐々木　無電に非常に大きな貢献をした升井さんに関して何かあれば。

吉田　升井さんは本当に揺籃（ようらん）時代から手掛けて終戦までの大連絡網に発達させた。大変な無線の功労者であるということだけは、みんな一致していると思う。

阿部　酒の好きな人だった。酒をあれくらい好きな人は少ない。

川島　好きというよりも酒の仙人だ。

（新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下で」）

奉天時代の無電

大川幸之助（元同盟通信総務局庶務部長）

東方通信の奉天支局に無電機が持ち込まれたのは大正14（1925）年夏のことであった。この無電機は海路大連経由で輸送されたもので、通関が比較的容易であったために、図らずも在支那の支社局で運用を始めた第1号機となった。

東方通信の主幹伊達源一郎氏（後に新聞聯合社理事兼顧問、戦後参議院議員）の発案によるもので、最初はその年の春開始されたわが国の対外無線通信を在支那支社局に受信させ、さらに支社局相互にニュースの交信を行わせる計画であった。

奉天支局の無電機は満鉄付属地淀町7番地にあった支局地下室に設置し、同時に送られてきたスーパーヘテロダイン・ラジオ受信機を2階の応接室に置いた。当時、ラジオは愛宕山のJOAK放送所から送られる電波を受信する必要があり、ラジオ受信機を置いておけば、木柱のつなぎ合わせではあるが高さ25㍍に近い無電機用のアンテナが不審に思われない。ラジオ受信機は近隣に対するそのためのカムフラージュだった。

あるとき、地下室に泥棒が忍び込み、技術職員海老塚正義君（現日本電気）の背広とポケットに入れて置いた金が盗まれた。このままで済めば何のことはなかったのだが、それから間もなく、他の悪事から足がついて、この泥棒が領事館警察につかまった。社としては場所が場所なので盗難届を出していなかったのだが、泥棒の自供から被害が判明した。領警は犯人を連れて実地検証すると言ってきかない。私は桜井重義支局長の命を受けて、首席領事の内山清氏に一切の事情を打ち明け、署長を抑えて現場検証を勘弁してもらった。何しろ長波の時代であったから今日では想像もつかないほど大きな機械で、簡単に解体することも持ち出すこともできない代物であった。

一難去ってまた一難である。大正14年暮れに日本の秋季大演習参観から帰来した郭松齢（かくしょうれい）が突如、張作霖（ちょうさくりん）に反旗を翻した。居留民保護という名目で朝鮮軍の大部隊と総督府巡査とが奉天を中心になだれ込んで来た。朝鮮から来た通信部隊が市内にあった2基（1基は奉天駐屯部隊のもの）のうち一番高かったわが社のアンテナを見逃すはずがなく、これを貸せと言う。極力頑張ってはみたものの、相手が相手、時が時だけに、とうとう徴用されてしまった。幸い無電機は見つからずに済んだものの、事変が終わるまでの約1カ月間、不便を忍んで日本郵便局の有線電報で東京―奉天間を結んだことは言うまでもない。

奉天に少し遅れて、北京支社（徳光衣城支社長）では2階の一室に設置し、華人ボーイの出入りを禁じたのはもちろん、窓には防空カーテン用の分厚い黒布を下げて外部からの隙間を防ぎ、換気通風が甚だ悪い関係から暖房も極度に控え、加えて奉天のようにアンテナを建てるわけにはいかないので、ループアンテナや室内に指向性を持たせて張りめぐらせた銅線を代用アンテナに使用したのだから、猪股芳雄君をはじめ技術者諸君の苦労も並大抵のものではなかった。

私が本社へ戻ってからも無電との縁は切れなかった。その頃は長波から短波へ移っており、現地への真空管、部品など補給のための輸送事務である。送り先によって海軍横須賀鎮守府[22]もしくは宇品陸軍運輸部神戸出張所へ現品を携行依頼するわけだが、最初、陸、海軍本省からの私の紹介を兼ねた指令書を持参しただけで、その後は私の顔を見ただけで託送を引き受けてくれた。新聞聯合、同盟通信に対する世間の信頼度がいかに高かったかを物語る小話であろう。

昭和38年3月6日記
（新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」）

座談会 通信近代化の夜明け

昭和56（1981）年1月16日
同盟クラブで

（出席者）
田村源治（福岡支社長）
滝口義敏（調査部長）
吉田松治（南方総社昭南支社長）
上野伊三郎（連絡局電務部第2部長）
中村実（写真部電送主任）
森田勇（高知支局長）
永峰正樹（華北総局）＝司会

（注）田村から中村までは昭和20年（1945）年10月末、森田と永峰は昭和19年4月現在の同盟通信の役職。

❖ ❖ ❖

司会　今日は通信社の動脈とも言うべき通信・連絡手段の近代化の初期の頃の話をお伺いしたいと思います。まず田村さん。

田村　同報無線は当時の通信手段に革命的な変革をもたらしたものとして大きな意義があったね。ただ、話の順序として当時主役だった専用線のことから始めた方がいいかな。

森田　同盟通信社の発足当時―昭和11（1936）年初め―の長距離専用線は東京―神戸（2回線）と大阪―福岡（1回線）だけ。これに沿線がブランチしていた。あとの支局は市外定時予約。それに市内同報と電話が主役だった。ただ、市外専用線はその後、急に広がって間もなく札幌―東京、東京―福岡（2回線）、福岡―鹿児島、福岡―新京[35]と延びていきました。専用線にブランチしているところはともかく、その他は新聞社へのニュース到達時間がバラバラになり、悩みの種でしたね。

田村　同盟発足に際し、政府は国際放送の送受信の無線利用の特権を同盟だけに許可した。これは当時の電通にとっては大打撃で、聯合との合併をためらっていた電通も合併に傾かざるを得なくなったし、別の面では、後日、同盟への国内同報無線許可の先触れとなるものとして、大きな意味があった。

司会　同報無線が実現するまでの経緯を。

田村　私が14年10月に上海から帰って通信局次長兼初代放送部長を仰せつかったんだが、これは同報無線発足のための機構整備ということだった。そもそも、無線を使って記事を一斉に早く送ろうということは、岩永（裕吉）さん、古野（伊之助）さんたち大先輩の早くからの念願でね。しかも古野さんは初めから文字電送を理想にしていたんだが、一挙には難しいとモールスによる無線送信ということになった。

　ところが逓信省は無線の国内向け通信はなかなか、うんと言ってくれない。日支事変が起こり、情勢も変わって、やっと重い腰を上げたのが13年でしたかね。二、三十万円の調査費を出し、続いて認可の方針を打ち出した。私が東京へ戻ったのは同盟でテストを始めた頃でしたね。

司会　14年夏ごろと思うが、同盟社報に「同報無線完成せり」の社告が出ていました。

田村　許可されたと言っても、送受信はすべて逓信省の中央電信局、または地方電信局の職員しかやらせなくて…。

上野　「電信、電話は政府これを管掌す」ということで逓信省ががっちりと管理していましたから。

田村　原稿をカタカナに直し、同盟2階の中央電信局分室に持っていく。そこでモールス符号のテープをつくり、分室から千葉県の検見川送信所へ。そこから電波で支社局へ送る。支局でカタカナを漢字交じりに翻訳して新聞社へ、という仕組みだった。

司会　全支社局で受けたんですか。

田村　最初は二十八、九ぐらいだった。ただ、初めの頃は担当者が不慣れなこと、デリンジャー現象[268]などでいわゆる〝虫食い〟だらけ。見るも無残の体たらくだった。

森田　支局では〝虫食い〟の穴埋めが一苦労。本社や支社の通信部は問い合わせの応対にてんやわんやの騒ぎでしたね。

田村　最初、500字区切りで1日4万～5万字、多い時で6万5千字ぐらいだった。しかしだんだんと送信量も受信支局も増えていった。

上野　同報無線開始の際、一番困ったのは受信機が少ないことでした。メーカーだと高価なものは製作に2、3年かかる。それでは間に合わないので、世田谷の技術部分室で突貫作業でつくり、やっと二十数局が開局にこぎつけたという次第だった。

田村　同盟の技術陣のレベルは大したものだったよ。話は満洲事変（1931年）の頃になるが、聯合は無線機で通信していた。もちろん違法だった。電通は飛行機やオートバイだったので、全然勝負にならなかった。あのときの無線機は上野君たちが作ったものだそうだね。

写真を無線電送

司会　日支事変のとき、写真を現地から東京まで初めて無線電送して話題になったとか。

中村　そう。民間では最初でしたね。13年でしたが、敵の要衝を攻略して北上した寺内寿一司令官の感激の写真を天津から東京へ電送したんですが、フェーディングが入ったものの結構使えたので、好評を博しました。この電送機も上野さんたちが製作したものです。

吉田　補足的な説明になると思うけど、無線利用の技術的な研究は早くから進められていたが、同盟発足のとき企画部が新設されてこれを担当、国内同報無線が認められた13年夏には「技術部」となり、私が初代部長となったんですが、内幸町分室で同報用無線機器や従軍用小型発信機などを作っていた。ここも狭くなり、半年後に世田谷に移転したが、これが後に技術研究所になるわけです。機器関係の研究、製作は初め本社側で私たち、大阪支社で上野さんらと、競争の形で進めていたんだが、後に本社に合流したのです。

田村　戦争が激しくなると従軍記者と一緒に行くオペレーターが不足して困っちゃった。そこで中央、地方の電信局からオペさんを大量に採用して送り出したこともあったね。

滝口　同報無線は国内だけでなく、朝鮮、台湾など東アジアでも受信できた。

田村　同報無線は革命的な通信手段として、同盟時代だけでなく共同通信の初期まで威力を発揮したが、同時に同盟と逓信省、支社局と地方電信局との関係を緊密にした点でも特筆されるものだった。関連して一言付け加えておきたいのは、12年4月に伊藤正徳さんが持っていた「無線時事[269]」を同盟が二十何万円かで買収して、船舶向けのニュース送信を継

承したが、これが現在の「放送部」に発展していくことになるんだね。

司会　共同になって文字電送の時代に移るわけですが、研究はいつごろから。

吉田　戦前から研究していましたよ。それもテープ式ではなくページ式だった。上野さんたちが苦心して作り上げたのを官庁で使っていました。

上野　初めは〝模写電送〟と言ったんですが、私が研究を始めたのは昭和4、5年ごろからです。その後、これが古野さんや岩永さんの理想と分かってから、私たちも急に張り切りましてね。十二、三年ごろ、アメリカの機械を買って研究していたんですが、14年でしたか、萩原忠三さんが「RCAにこんな良い機械があるよ」って持ってきてくれた。それを手持ちの携帯用電送機を改造して組み合わせ、テストしてみたところ、うまく字が出てきましてね。これなら確実にできる、という自信がついたんです。翌年には大阪―東京間で折り返し実験にまで進んでいます。

吉田　その文字電送機はページ式の電磁プリンターなんです。初めはスピードが遅かったが、改良を加え、一部に実用化されたが、専用線網への使用までには至らなかった。

森田　戦時中に、記事量は増える、速記者は不足するで四苦八苦しているころ、上野さんが「そのうちに楽になるようにしてやるからね」と言ってくれたので、大いに期待していたものです。（以下略）

（「共同通信社友会会報」第22号　1981年3月31日発行）

ポータブル無線機秘話

佐々木健児（元新聞聯合奉天支局長、元同盟通信中華総社長）

満州事変といえば、昭和6（1931）年秋の出来事だから、思えばもう30年余り前の昔話である。当時と今日とは、何事によらず比較すること自体が無理なのだが、当時の記者は、通信機一つ持たず、それこそ徒手空拳、零下30度以下の凍てついた雪の荒野を部隊とともに駆け回っていたものだ。

同年11月初めから中旬にわたった嫩江（のんこう）、昂々渓（こうこうけい）、チチハル方面の作戦に、新聞聯合社からは森元治郎（もとじろう）、村田貞助の両記者と鈴村茂写真班員の3名が、防寒装具もりりしく勇躍従軍したものの通信機関がないため、酷寒の北満の戦線でさんざん苦労しながら一本の生ニュースも報道できず、泣くに泣かれぬ目に遭った。この作戦では、終始前線従軍班との連絡が取れず、結局奉天で関東軍司令部の情報を頼りに戦況その他をカバーしたが、数百両に上る凍傷兵の輸送列車を四平街に迎え、その惨状を詳報した帆足升君の記事が、聯合が直接取材した唯一の生ニュースであった。

北満を制圧した関東軍は、息継ぐ暇もなく今度は一転、錦州（きんしゅう）攻略[270]に動き出した。このままでは、いくら従軍班の頭数を増やしても、北満の場合と同じ結果になるのは分かり切っていた。

折も折、12月早々、本社から升井芳平さんがやって来て、奉天支局に短波送信機を据え付け、本社との連絡に成功した。これを前線に持って行けたら文句なしに万々歳だと、升井さんは昼夜兼行、持ち運び可能の送受信機の製作に取り組み、関東軍が新民屯（しんみんとん）の線で態勢を整えるため出

動を開始する直前に試作機が出来上がった。奉天市内でのテストもそこそこに本格的テストは、現地で行うことにして森、村田両記者、鈴村写真班員、高橋栄一オペレーターの一行が、新民屯に携行した。テストが成功すればそのまま前線に持って出る手はずであった。

この試作機は、1・5ワットないし2ワット程度のものだったようだが、送受信機を一つの木箱に詰め、電池をもう一つの木箱に入れた。2箱1セットのもので送受信機は大体2貫目（約7・5キロ）くらい、電池の方は3、4貫目もあったろうか。これをオペレーターと記者が1箱ずつ持って行くという仕組みだ。これがその後、次第に改良が加えられて支那事変、太平洋戦で活躍した軽便精巧なポータブル無線の元祖になるのだが、いかにもお粗末なものであった。

それでも他社は移動無線など持っていないから、「これさえあれば、鬼に金棒だ」と升井さんを囲んで感激の祝杯を挙げたものだ。もちろんこれは聯合だけが持つ秘密兵器だから他社には絶対に秘匿することになっていた。

テストは従軍班が新民屯に到着したその日の夕刻から始めた。波長や更新時間の打ち合わせには、新民屯の領事館の電話を使うことにしてあった。私は領事館に電話して森君を呼び出した。

「森君か」と聞くと、少しもつれたような声で「そうです、森です」と言う。どうも森君の声とは違うようだが、酒気を帯びているのだろうと、あまり気にも留めず、かねて打ち合わせておいた暗語（あんご）で、波長と交信時間を指示した。

「分かったか」と確かめると「分かりました」と答えた。指示した時間にいくら呼び出しても、試作機からは何の応答もない。やきもきしていると、新民屯から電話がかかって、特徴のある、あのかすれたような森君の声で「最前、電話だったそうだが」ときた。「先ほどのは君ではなかったのか」と聞くと「あれは電通のH君で、H君が電話のあったことを知らせてくれたのだ」というのだ。

さては秘密が漏れたかと私は一瞬、目の前が暗くなった。いくら暗語ではあっても至極簡単なもの。蛇の道は蛇、相手も新聞記者だ。「何時何分から、波長いくらいくらで送信せよ」と言っていることぐらいは分かるだろう。私は激しい絶望感に襲われて「Hを殺してしまえ」と怒鳴った。森君は「殺さなくても」と言う。「秘密を握られた以上、致し方ない。村田君と2人でHを郊外に連れ出して拳銃でやれ。雪は来年の春まで解けやしない。そこは戦場だ。やれといったらやれ」と私は重ねて怒鳴った。

やがて新民屯の森・村田両君から「H君を詰問の結果、同君は領事の新聞記者歓迎宴のため泥酔していて、電話の内容も全然覚えていないことを確認したので、万一電話の内容を漏らした場合は、いかようの処置を受けても異存ない旨を明記した念書を取ったから、今すぐ殺すのは見合わせたい」と報告してきた。私は念書ぐらいで安心できるものか、とにかくやってしまえと、繰り返し電話口で怒鳴りながらも、ひそかに胸をなで下ろしたことだった。

試作機のテストの秘密はついに漏れなかった。錦州作戦[270]で期待通りの成果を収めたのであった。

（「新聞通信調査会報」第25号　1965年1月1日発行）

昭和史と歩んだ数奇な経験

木原喜一（元同盟通信技術研究所）

昭和8（1933）年8月だった。私は満州国（現中国東北部）新京（現長春）にあった関東軍司令部（菱刈隆大将）から出頭を命じられた。案内された所は司令部の地下室。テーブルが置かれ、大きな地図が広げてあった。前に座った軍服姿の男が言った。「俺は奉天（現瀋陽）特務機関長である」。陸軍大佐だった。後に第7方面軍（マレー、スマトラ、ジャワ、アンダマン諸島担当）司令官、教育総監などを歴任、A級戦犯で刑場の露と消えた土肥原賢二大将である。

大佐は続けた。「これから緊迫しているソ満（ソ連＝現ロシア＝と満州）国境の状況を説明する」と前置きし、縷々述べた後、「ソ連極東軍の配置・移動状況、規模などの情報を速やかに知りたい。情報班からの情報は時間がかかりすぎる」と当時、機関が置かれている困難な状況を説明した。

そして「君と君の無線機を国のために役立ててもらえないか。その間、君の命はおれに預けてもらいたい。やってくれますね」。いつの間にか、右手にピストルが握られていた。部屋は二人っきり。威圧感があった。私は同意した。

さらに「シベリア各地を移動しながら新京まで通信は可能か」と聞かれた。私は次の条件が満たされれば、と答えた。①無線機は小型で出力2ワット（私の特製）②新京の司令部の受信機はスーパーヘテロダイン③新京の送信機出力は500ワット④電離層（現在は衛星）の反射を利用⑤サイドカーはハーレーダビッドソン⑥電源は屋井乾電池―60度腹巻型⑦サイドカー運転と暗号解読のできる中野学校[218]出身者を付ける⑧任務は5年以内―など。

9月から満州中野学校生として猛特訓を受け、9年9月卒業。陸軍少佐に任命された。約1年間、通信テストなどの訓練の後、本格的活動が始まった。10年9月だった。内地の中野学校出身者のU中尉と満州の満州里を出発した。ハーレーダビッドソンで蒙支（現モンゴルと中国）国境沿いを移動。あるときはモンゴル、あるときは中国、そしてゴビ砂漠の中も走った。

私たちは馬賊総司令の尚旭東（日本名、小日向白郎）にも会った。馬賊とはもともと満州で横行した騎馬の群盗のことだが、このころは地方の軍閥を指していた。私は蔣介石中華民国総統との会見あっせんを依頼した。私たちが訪れた土地は主にアジトのある所で、馬賊や白系ロシア人[99]が多かった。土肥原大佐はかねて尚総司令を通じ、彼らに巨額の資金を流していた。そして、ソ連軍の動向を探ってもらっていた。私たちはそれを聞き、関東軍司令部に打電するのが主な任務だった。

蔣介石と会見、「伝言」伝える

11年6月15日、烏魯木斉を出発。敦煌、酒仙、蘭州などを経由し、長武に着いた。9月20日だった。西安からそう遠くない街だった。ここで、尚旭東からの連絡を待った。蔣総統との会見可否に関してである。

同年11月25日は、私にとって忘れられぬ日となった。西安の華清池客殿で、ついに蔣総統に会えたからだ。私は土肥原大佐の「伝言」を伝えた。「毛沢東、スターリンがあなたを狙っている。日本よりそちらに目を向けないといけない」という趣旨だった。そして、ソ連軍の動向、ソ連と中国共産党との関係などの情報も手渡した。

総統は答えた。「分かりました。日本とは戦争しない、と土肥原さん

に伝えてほしい」。蔣介石は温かみのある、実に魅力的な人物だった。私たちの安全を気遣い、帰りのパスポートを自書してくれた。戦後、日本に対し「以怨報徳」（恨みに徳で報いる）と語ったことが分かる気がした。

しかし、この直後に残念なことが起こった。同年12月12日、西安事件[93]が発生。満州の軍閥、張学良が西安で蔣介石を監禁した。国民党と中国共産党が内戦をやめ、抗日民族統一戦線を結成するよう強要。その通りになって、総統の土肥原大佐への〝証言〟が結果的に短命に終わったからである。

私は7年7月、満州に渡った。19歳。無線技術者だった。北越新聞社にニュースを送って暮らした。新京日日新聞社の関谷重吉記者と知り合った。彼は言った。「君は取材より本業を生かし、満州国のために役立ちなさい」。そして「和登商行[271]」入社を勧められた。

当時、新京に無線技術者は一人もいなかった。このためラジオや無線機の修理は大忙しだった。政府要人の家庭や職場を訪問することもしばしば。その中に東条英機憲兵司令官（当時少将）や男装の麗人、川島芳子らがいた。

芳子は清朝・粛親王の王女で、れっきとした中国人。本名を金璧輝といった。日本軍の対支諜報謀略工作の一端を担っていた。同時に、蔣介石軍にも通じた二重スパイとのうわさもあった。とかく毀誉褒貶（きよほうへん）相半ばする人だった。

8年8月、和登商行に和服姿の紳士が入ってきた。無線送受信中の音を聞き、実験室に。「交信先はどこか」。私は「奉天です。波長を選べば大連、東京とも可能」と答えた。すると、紳士は「もっと聞きたいことがあるから後日連絡する。私は土肥原だ」と述べて帰った。冒頭に紹介した私と奉天特務機関長との最初の出会いだった。

特務機関から復員後の13年10月、私は同盟通信社の姉妹機関である満州国通信社（国通）大連支社を訪ねた。升井芳平支社長は私にとって父親代わりのような人だったからだ。不在中の報告をした。すると、支社長から「今度は大型無線機を勉強するように」と言われた。

「義昌無線」を紹介され入社。ところが15年9月、国通理事・連絡局長になっていた升井氏から「義昌を退社し、至急新京に」と呼び出された。関東軍司令部から国通の通信網を整備せよ、との命令があったためだった。具体的には満州全土から東京の同盟本社に「情報が10分以内に届くように」というものだった。

FAX1号が完成

17年11月、その通信網がやっと完成した。専用線と無線を組み合わせ、新京の国通本社の中継なしに、東京の同盟との間を通信可能とした。関東軍から金一封をもらい、松方三郎国通理事長も大変喜んでくれた。

18年6月、私は国通から同盟へ出向。11年ぶりの帰京だった。東京・世田谷にあった同盟技術研究所が新職場。文字電送機を開発中だった。軍艦に天気図を送るのが目的。間もなく世界に先駆け、FAX第1号機が完成した。

その直後、同年9月に私は召集された。中央直轄の電信第1連隊（上田稔中佐）に入隊。19年7月、ビルマ（現ミャンマー）の「断」作戦に参加した。インドのアッサム州レドと中国雲南省昆明を結ぶレド公路。米英連合軍が蔣介石軍へ物資を輸送するための重要道路だった。連合軍はこの公路奪還のため、日本軍に圧力を加え、激戦が展開されていた。「断」作戦は、この連合軍の企図を「断つ」のが目的だった。あの辻政信参謀はこの時期、大佐に昇進し、第33軍（本多政材中将）の高級作戦参謀になっていた。

20年8月13日。この日を私は忘れることはできない。ラングーン（現

ヤンゴン）に近いビリンにいた。同盟の対外同報が「日本、ポツダム宣言受諾の意向」とのニュースを流しているではないか。直ちに軍司令部に報告した。すると参謀が怒鳴った。「黙っとれ。漏らしちゃ駄目だ」

22年7月24日、私は宇品（広島）に復員した。既に同盟はなく、共同通信社に入社。テープ式ＦＡＸを完成させた。

（「新聞通信調査会報」第４９１号　２００３年９月１日発行）

第2節　電送技術

同盟式文字電送機

高柳淳雄（元同盟通信連絡局電務部）

同盟に採用されたのは昭和17（1942）年の秋である。仕事は同盟技術研究所が開発したばかりの試作機「同盟式文字電送機」の送受信操作である。

セットは2台あって、1台は愛宕山（あたご）の海外情報受信所、いま1台は市政会館[126]1階の大編集室の正面入り口近くに置かれていた。愛宕山の方は送信、本社の方は受信で、その間約4キロは有線でつながっていた。タイプでたたいた10行程度の英文の速記原稿すら完全に受信できず、操作中やたらと光電管が切れた。そんな訳で、受信紙を外信部のデスクに届けるたびに渋い顔をされた。ところが眼鏡にパイプの三輪武久さんは、どんなひどい虫食いを持ち込んでも「いいよ、いいよ、こっちは英語が分かるんだから」とおおようなもの。

18年の冬ではなかったかと思う。情報局[149]の天羽英二（あもうえいじ）総裁が、愛宕山の文字電送機を視察するというので、緊張して待機していた。国民服の一団がどやどやと入ってきたのでスイッチを入れると、途端に光電管が切れてしまった。予備と交換したが、回路が故障しているらしく灯（とも）らない。光電管は真っ暗なまま。ドラムをガラガラ回した。それでも総裁は、真面目な顔で見ていたが、鷹嘴（たかはし）寿局長は、目をパチパチさせていた。

愛宕山の海外情報受信所は一風変わったつくりになっていた。玄関から真っすぐに廊下が奥に抜け、両側に窓のない総フェルト張りのそれこそ息の詰まりそうな密室が並んでいた。これらの部屋には、当時としては最高級のRCA、フィリップなどの受信機が置かれ、〝敵国放送〟をタイプしていた。廊下の突き当たりには半月形の部屋があり、ここに文字電送機が据え付けられていた。前面はガラス張りで、市政会館が望め、天井の片隅からはアンテナのリードが束になって引き込まれていた。密室でタイプされた原稿を二世さんから受け取り、文字電送機にかけるのが私の役目である。

男ばかりの二世さんの中に女性が1人いた。丸い顔に金縁眼鏡をかけ、気さくで今風に言えばハイカラおばはんという感じ。小柄な男の二世さん（ご主人だったようだ）と妙な手付きでみかんを食べているのをよく見か

けた。うかつな話だが、彼女が「東京ローズ」[186]であることを知ったのは、昭和30年代も半ばになってからであった。

（「新聞通信調査会報」第285号　1986年8月1日発行）